所　報

研究室活動報告

A　教育哲学研究室

教育哲学研究室の1976年度の活動は前年にひきつづいて各メンバーの個別研究を中心として行われた。詳細は別項の通りである。なお前年度報告に言及した，変貌しつつある学内外の状況を考慮しての新たな研究教育計画の策定作業は継続して進行中である。

1976年10月16．17の両日にわたり，日本倫理学会第27回大会が本学を会場として開催されるに当り，本研究室関係の教職員，大学院教育哲学専修学生，学部教育学科学生の多大の協力によって，盛会裡に二日間の日程を無事終了することができた。なお本大会の共同研究主題は「良心」であって，熱心な討議が行われた。

a．教育哲学

日高第四郎客員教授

昨年１月病に倒れられて後，引きつづき入院静養中。

小島軍造客員教授

昨年度にひきつづき，自宅にて静養中。

金子武蔵客員教授

大学院において西洋近代思想演習（ヘーゲル）を担当。

讃岐和家教授

Ⅰ　研究の主題

教育的価値論の見地からみた教育哲学の諸原理について。

Ⅱ　学会発表等

(1)　日本教育学会第35回大会（76年９月３日，４日，５日，早稲田大学）に出席，第１日目に「教育原理部会」第２会場の司会者をつとめた。

(2)　教育哲学会第19回大会（76年10月10日，11日，共立女子大学）に出席，「教育における国家性と国際性」を主題とするシンポジウムの提案者の一人として，同じ表題で発表を行なった。

(3)　日本倫理学会第27回大会（76年10月16日，17日，本学）において大会実行委員をつとめた。

(4)　日本デューイ学会第20回大会（76年10月23日，24日，甲南女子大学）に出席，第２日目に第１会場の司会をつとめた。

(5) 国立教育研究所のスタッフおよび全国約20の大学の研究者25名をもって組織される「大学院の組織および運営管理に関する総合研究」にメンバーの一人として参加した。

Ⅲ 著　　作

(1) 「私立大学における厚生補導施設の管理運営の現状と問題点」，雑誌『厚生補導』1977年2月号。

(2) 「ＩＣＵ教養学部の四半世紀」，雑誌『ＩＤＥ』，1977年3月号。

Ⅳ その他の活動

(1) 教育哲学会の機関誌，『教育哲学研究』の編集委員。

(2) 民主教育協会主催，第8回「学生生活セミナー」の企画委員および実行委員。

川瀬謙一郎準教授

Ⅰ 研究中の主題

(1) ウェーバーの宗教社会学にあらわれた，社会層と人間類型との関連の研究。

(2) 宗教的共同体とそのエートスの研究。

Ⅱ 学会参加，その他

(1) 日本倫理学会第27回大会（前記）に参加。

(2) 倫理思想史研究会（代表白田貴郎千葉大教授）において柳田国男の視点について報告。

Ⅲ 著　　作

論文「キリスト教と共同体のエートス」，金子武蔵編『ウェーバー』（日本倫理学会論集第十）1976年10月，以文社 pp.143～161

磯田一雄教授

Ⅰ 研 究 活 動

(1) 授業研究。この1年数校の小学校や中学校で「詩」の授業を自ら行ない，実践分析へのひとつのアプローチを開こうとした。これは所属する「教授学研究の会」の研究動向にみあっている。同会の夏の大会（青森県十和田市）や冬の集会（静岡県湯ガ島温泉）はじめ各地の公開研究会・月例研究会などにかなり精力的に参加した。

(2) 教科外活動の研究。国立教育研究所での「特別活動」にかんする調査研究が一段落したので，すぐれた実践やその理論を集約する研究誌の刊行の企画に参加している。

(3) 教授理論史研究・教育方法史研究。この1年間はブランクであった。

Ⅱ 学 会 活 動

1976年10月に東京大学で行なわれた日本教育方法学会第12回大会で「課題研究・生活経験主義の再評価」の提案者となった。

Ⅲ 著　　作

「スキーの教授学的考察」，『開く』第14集，1976年7月，明治図書。

『教授学と生活指導』（これまでの発表論文のいくつかに手を入れ，再構成したもの），1977年5月刊行予定（明治図書）。

その他，第一法規より刊行予定の『教育学事典』に「課外活動」「自由研究」「クラブ活動」など5項目を寄稿。

b.　キリスト教教育哲学

中川秀恭教授

I　学会における研究発表

(1)　「歴史認識と終末論」，51年10月，日本宗教学会学術大会。

II　著　　作

(1)　『キリスト教と日本』，共著，51年9月発行，　日本基督教団出版局

(2)　「石原謙博士におけるキリスト教史観」，『聖書と教会』51年11月，日本基督教団出版局

c.　教育思想史

長清子教授

I　研究活動

(1)　「近代日本におけるキリスト教の受容と人間形成の問題」，および，「天皇制の思想史的研究」を幾年かにわたる研究課題としていると共に，日本学術振興会，および，Harvard Yenching Institute（ハーバード燕京研究所）の助成金による「アジアの近代化と人間」の問題に関する研究をアジア文化研究所において，同僚と共に行っている。日韓比較研究には韓国人学者たちの協力をも得ている。

(2)　日本教育哲学会常任理事。

(3)　The British Association for Japanes Studies の年会が1976年4月9日～11日，ダーラム大学（University of Durham）に於て開催されたが，guest として招かれ，研究報告を行った。

(4)　The United Board for Christian Higher Education in Asia (UBCHA) のアジア地域よりの二名の理事の一人として理事会（年二回）出席のため1976年11月15日～20日，New York に出張。その折，コロンビア大学の East Asian Institute を訪問，学者たちと語りあう。

(5)　国際文化会館日米知的交流委員会の委員（同委員会設立当初より）。

II　著　　作

(1)　著書――『正統と異端の〝あいだ〟――日本思想史研究試論――』（東京大学出版会，1976年9月20日，344頁）を出版。

(2)　論文――「天皇観の相剋――敗戦と天皇制――」を綜合雑誌『世界』（岩波書店），1976年10月号，11月号，12月号，1977年3月号，4月号に連載中。

(3)　学会報告論文 "The Dual Image of the Japanes Tennō: Conflicting

Foreign Ideas about Remoulding of the Tennō-sei at the End of the War" が, *Proceedings of the British Association for Japanese Studies,e* Volume One: 1976, Part One: History and International Relations, edited by Professor Peter Lowe (University of Manchester)に収録され, University of Sheffield, Centre of Japanese Studies より出版さる。(pp. 110—130)。

Ⅲ 講演・放送など

(1) 1976年6月，東京女子大学において講演，「新しい約束をさぐる——日本の伝統文化との対話——」

(2) 1976年10月，宮城学院大学創立九十周年記念講演，「キリスト教と近代日本の女子教育」

(3) 同10月，NHK放送「内村鑑三の人と思想」(3回)

(4) 1977年3月，講演「キリスト教と天皇制——戦前・戦中・戦後——」，日本基督教団東京教区。

(5) 同3月，講演「福沢諭吉の婦人観」，福沢諭吉協会，「土曜セミナー」，於銀座交洵社。その他。

d. 比較教育学

ベンジャミン・C・デューク教授

Ⅰ 研究活動

1. The Administration and Supervision of Education in Postwar Japan, to be published in UNECO's INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION

2. The significance of the Japanese Supreme Court's decision of 1976 concerning the relationship between the Ministry of Education, the school boards, and the teachers.

3. The effects of the New Society declared by Psesident Marcos on Philippine education.

4. Travel: Philippines in November-December, 1976 for educational research in preparation for a new course on EDUCATION IN DEVELOPING NATIONS

Ⅱ 著作

Book: Nihon no Sentōteki Kyoshitachi, Kyoiku Kaihatsu Kenkyujo, 1976

Article: Why Noriko Can Read; Some Hints for Johnny, EDUCATIONAL FORUM, Ianuary, 1977

上林喜久子非常勤助手

Ⅰ 学会活動

口頭発表

「高校用アメリカ史の教科書における日本に関する記述，1951—1972」於 第12

回日本比較教育学会（昭和51年10月）

II 著　　作

(1) 「アメリカの短期大学と女子職業教育の歴史」国際基督教大学『教育研究』No.19，1976年3月

(2) 「高校用アメリカ史の教科書における日本に関する記述変化，1951—1972」『日本比較教育学会紀要』第3号，1976（印刷中）

B 教育心理学研究室

昨年度に引き続き，都留春夫教授はカウンセリング・センター所長兼国際教育交流室長，星野命教授は大学院副部長の任にあたり，今年度は更に古畑和孝教授が教養学部教育学科長に就任して行政に参加した。

星野命教授は8月以降，サバティカル・リーブをとり，アメリカ合衆国シカゴ市郊外の小数民族からなる地域社会の比較文化的調査と，カリフォルニヤ大学サンタ・バーバラ分校における共同研究を終え，現在ハワイのイースト・ウエスト・センターで国際共同セミナーに参加中である。

冬学期には新たに芳賀純・筑波大学教授と青木孝悦・千葉大学助教授の両氏を非常勤講師として迎えた。芳賀講師によって長年休講を続けてきた言語心理学のコースが復活されたことはまことに喜ばしい。青木講師は星野教授の休暇中，パーソナリティの心理学を担当する。

研究室主催の行事として，5月22日には Dr. Lovejoy を迎え，"Mastery Teaching System" という題の講演会を開いた。また，10月30日には研究室懇話会をシーベリー教会堂で開き，学部学生大学院院生教職員が一堂に集まって楽しく語り合った。

梅津八三教授

1. 研　究　活　動

(1) 研究課題「各種障害事例における自成信号系活動の促進と構成信号系活動の学習に関する心理学的研究」（昭和51年度文部省科学研究費補助，総合Aによる）における研究代表者として，各種障害の各特性に対応する心理学的補勢工作に一貫する基本作業仮設の整備にあたり，あらたに，行動体制系の複素数系への写像によって，〝生体の自発性〟現象の発現条件主要項を，信号系活動による「陰圧効果」より導き出すことを試みた。

(2) 同上研究課題の研究分担者として，「盲ろう者班」を受け持ち，常時（国立久里浜養護校，国立聴言障害センターなど），合宿（重複教研），研究出張（横浜訓盲院，北海道盲，山口盲など）の機会をえて，実践研究をおこなった。

(3) 同上課題内の「開眼受術者班」の協力者として，象徴性信号系としての〝知

覚像ゝ構成原則について，ポゲンドルフ図形などのいわゆる錯視図形配置を，あらたな仮設角度から照射して，それぞれの知覚像成立に関する行動体制特性を究明した。

2. 著　　作

「心理学的行動図」：重複障害教育研究所紀要，創刊号，1—44，昭和51年8月。

古畑和孝教授

I　研　究　活　動

1）均衡理論，認知・態度の斉合化傾向に関する基礎的研究を続行している。

2）日本教育心理学会研究委員会委員は重任され，継続している。

II　学　会　発　表　等

今学年度は学会発表は行わなかった。1976年日本教育心理学会第18回総会（於・埼玉大学）ならびに，日本心理学会第40回大会（於・中京大学）にそれぞれ出席した。

III　著　　作

1）準拠集団・準拠人と人格形成.

依田新・他（編）「人格の形成」（大河内・海後・波多野（監）教育学全集・第11巻）増補版・補説，小学館，1976，11—16頁.

2）態度と斉合化傾向.

水原泰介（編）「個人の社会行動」（末永・池内・水原（編）講座社会心理学・第1巻），東京大学出版会，1977，133—190頁

3）競争；準拠集団；準拠枠；発達課題.

依田新（監）「新・教育心理学事典」金子書房，1977，201—2；392—3；393—4；646—7頁

4）学術的著作では全くないが，個人的意味の大きいものとしては，次のものを編集刊行した。

「追想・古畑種基」珠真書房，1976.（255頁）なお，その中に，「父と私」（30—50頁）を執筆。

原　一雄教授

I　研　究　活　動

1）学習の生理心理学的研究

（a）文字の認知における左右視野間の非対称性。

（b）切断脳サルにおける弁別学習の両眼間転移と脳損傷の影響。（昭和51年度文部省科学研究費「一般研究D」）

（c）ラットの情動的条件性反応抑制に及ぼすニコチンの影響。（たばこ総合研究センター委託研究）

2）高等教育の評価

（a） 私立大学の教育・研究の質的向上を図るための評価調査。（日本私立大学連盟大学問題検討委員会第六分科会の主査）

（b） 高等教育機関における生涯教育の評価表作成。（トヨタ財団研究助成金による委託研究）

（c） ＩＣＵの教育環境調査

上記の諸研究には多くの学生が協力参加し，その共同研究の成果の一部が次の今年度学士論文としてまとめられた。

佐藤　真：視覚再認法による大脳半球機能的非対称性の研究

内ケ崎民和子：非言語的刺激認知における大脳半球機能的非対称性の研究

藪本哲久：ラット条件性情動反応（ＣＥＲ）に対するニコチンの精神薬理学的効果を調べるための実験的研究

吉田敦子：マウスの離乳期以後の生育条件と成熟後の母性行動に関する研究

島田博美：教育環境の調査研究：ＩＣＵ在学生による教養学部の評価に関する一考察

村山興子：教育環境の調査研究：大学生の価値志向と学園雰囲気の認知についての一考察

松村治子：教育環境の調査研究：教育環境認知と生育環境及びＩＣＵの予備知識の関係について

牧野文恵：教育環境についての一研究：パーソナリティー次元と教育環境評価の関係について

3） 千葉大学文理学部（生理心理学），教養部（総合科目：認識と行動）の非常勤講師をつとめた。

Ⅱ　学会発表，講演等

1） 1976年９月　日本心理学会第40回大会（於中京大学）にて「加算作業における左右視野間の非対称性について」を発表。（同論文集441—442頁収録）同部会の座長をつとめた。

2） 1976年５月　日本私立大学連盟総会（於京都グランドホテル），同年６月，同連盟財務・人事担当理事者会議（於軽井沢晴山ホテル），同年７月　同連盟学長会議シンポジューム（於私学会館）にて「大学問題検討委員会の中間報告」を行なった。

3） 1976年７月（座談会）「大学入試改革・これからの課題」に参加。（月刊『高等教育』，1976年９月号，Vol. 9. No. 12, pp.58—69に収録）

4） 1976年８月たばこ総合研究センター研究報告会にて「ニコチンと学習」につき講演。

5） 1977年１月（座談会）「私立大学の現状と未来像」に参加。（『大学時報』，1977年３月号，Vol. 133, pp. 6 —28に収録）。

Ⅲ 著　　作

1) 「動物学習におよぼすニコチンの影響，その1：ラットのニコチン摂取と迷路学習ならびに視覚弁別学習」ＴＡＳＣ研究報告・７６ＳＡ０７０３　たばこ総合研究センター　1976, pp. 17.

2) （監訳）ジェイムズ・Ａ・パーキンス編「明日の高等教育」研究社，1976, pp. 346.

3) （随筆）「J. A. パーキンス氏の高等教育の展望――明日の高等教育(Higher Education : form autonomy to system）から――」，『ＩＤＥ』（民主教育協会誌）No.171, 1976. 8, pp. 35—42.

4) （M. E. トロイヤー，原喜美，田中清彦共著）「卒業生によるＩＣＵ在学経験の評価――国際基督教大学創立25周年記念卒業生追跡調査報告（要約)」，『教育研究19』，1976, pp. 65—114.

5) (With M.E. Troyer, Kimi Hara & Kiyohiko Tanaka) "Alumni Evalation of Their ICU Experience ——Follow up of Alumni as a Study Project for Commemorating the 25th Aniversary of the Founding International Christian University", Division of Education, ICU, 1976, pp. 57.

6) 「日本私立大学連盟大学問題検討委員会第六分科会報告書：総論第一章　分科会の方針（pp. 4—6），第二章　教育・研究の質的向上に関連する諸要因――大学の自己評価（pp. 7—20)，各論第二章　教員の評価と大学設置基準(pp. 36—43)，第五章大学院（pp. 58—63)」，日本私立大学連盟，1976.

7) （随筆）「たばこと生物の進化」，ＴＥＳＣ Monthly（たばこ総合研究センター誌）Vol. 2—10, 1976, p. 2.

8) 「設置基準と私立大学：国際基督教大学の場合」天城勲・慶伊富長編『大学設置基準の研究』（第Ⅳ部第一章)，東京大学出版会，1977, pp. 175—191.

9) （佐藤　真・久保　貴共訳）「生理学，欲求および情動」，「情動的経験とその表出」南　博監訳・大山　正訳『図説・現代の心理学　4.　感覚と感情の世界』第4，5章)，講談社，1977, pp. 141—255.

10) "How Far Down can We go to find Our Consciousness? Comments to Dr. Preilowski's Paper." *Hiroshima Forum of Psychology*, Hiroshima Univ., 1977, p. 6.

星野　命教授

Ⅰ 研 究 活 動

(1) 九州大学教育学部付属比較教育施設の綾部恒雄教授を研究代表者とする「米国における民族集団と文化的多様性に関する文化人類学的研究計画」に対して，文科学研究（海外学術調査研究）助成金が交付されることになったので，その研究の一部を分担することとなり，7月9日離日，シカゴ西郊のイタリア系アメリカ人の

多数居住する地域社会を対象として，同15日から10月8日まで現地研究を行なったのち，米国各地でユダヤ系，ポーランド系，メキシコ系，アフリカ系の住民社会の調査に当った他の研究班員とともに10月17日帰国した。調査結果は1977年5月21日の日本民族学会大会において口頭発表をしたのち，民族学関係研究誌上に発表される予定。

(2) 1974年2月より継続中の，日本学術振興会研究助成による「パーソナリティの発達に関する比較文化的研究：反抗期における自我形成と母一子相互作用」の研究分担者の一人として，東京都内の中層及び低所得層の家庭それぞれ50世帯の2歳児とその母親を対象とする実験及び面接調査の一部に参加した。聖心女子大学岡宏子・白井　常両教授，都立大詫摩武俊教授，千葉経済短大中村素子助教授らと毎月2，3回の研究会に参加するとともに，主に江東方面の家族調査を担当した（10月下旬)。また，当研究がタイ国（チェラロンコン大学)，フィリッピン国（フィリッピン大学）との共同比較研究をめざしているので，上記白井，詫摩両教授とともに10月31日離日，11月1—5日バンコク，11月5—10日マニラとそれぞれ，4，5日ずつ滞在して，各大学の共同研究者と研究目的・方法につき詳細な打合せと現地研究者による実験・面接を観察した。（1977年度は文部省科学研究費の助成をも受けられる予定)。

(3) 京都大学教育学部小林哲也教授を代表者とする文部省科学研究費助成による「在外・帰国子女の適応教育の条件に関する総合的研究」の分担研究者として，「人格および社会心理学よりの理論的研究」を担当した。これは近来海外に勤務在住したのち帰国する日本人の子女の数が激増し，その現地における適応と帰国後の再適応教育をめぐり急速に社会問題化している事実に鑑みて，3ケ年計画で行われるものの初年度で，理論的検討に先立ち，上記の海外調査の途次，米国は，シカゴ，ニューヨーク，サンフランシスコ，及びロスアンジェルスの日本人学校の見学，またはその責任者からの事情聴取と資料を収集し，さらにマニラの日本人学校をも訪問して同様の取材活動を行なった。

(4) 個人研究としては，社会言語学の立場から「日本語における身体語彙による表現」の研究を行ない，その結果の一部を発表した。（次頁3著作の項参照)

(5) カリフォルニア大学サンタ・バーバラキャンパスにおいて，約7週間の自由課題による研究を行なった。主として上記(1)の調査結果の整理と，日本人の行動，価値観に関する文献研究を行なった。

(6) 米国ハワイ州ホノルルにある東西センターの文化学習研究所において行われた4ケ月間（1977年1月—4月）の集中的研究セミナー(Cross-cultural research for social and behavioral scientists「社会科学及び行動科学研究者のための異文化間研究」）に参加した。アジア諸国（韓国，フィリッピン，ネパール，インド，オーストラリア，米国からの参加者とともに，著名研究者（米国，英国，オースト

ラリア）の連続講義及び討議，参加者の個人発表及び討議に出席するとともに，ハワイ諸島，日本その他の伝統文化の見学と，世界各地における在来文化の継承者である住民の行動，態度，価値感等の研究と教育方法等について，グループ研究計画を考案した。

II 学会発表等

(1) 1676年5月1～3日都市センターに於て開催された第2回コミュニティ心理学研究会にコンビーナーの一人として出席，討議に参加した。

(2) 1976年5月15，16，両日福岡県太宰府において開催された日本民族学会大会において，シンポジウム「イニシエーション：伝統と現代」にディスカッサントとして参加した。

(3) 1977年1月21日，2月8日及び9日の3回にわたり，米国ハワイ州ホノルル東西センター文化学習研究所における集中研究セミナーにおいて，口頭による個人発表を行なった。テーマはそれぞれ「日本人の行動における諸特徴と人格構造モデル」，「シカゴ西郊におけるイタリア系地域社会の現地調査」，「日本人の言語使用における『ひと』の概念」であった。

III 著　　作

（論文）「身体語彙による表現」日本語講座――第四巻，大修館書店，1976年12月。

（翻訳）「パーソナリティ」南博監訳「図説・現代の心理学」(Random House社，Psychology Today；An Introduction）第一巻，講談社，1976，第3章以下，(この訳業にはＩＣＵ大学院卒業生の，中里修子，在学生の佐山董子，八木沢慶子，ならびに昭和女子大学木村登紀子助教授の協力が多大であった)。

（同上）「オルポート，G.W.，心理学における人間：第II・III部」，依田新（Ｉ部），宮本美沙子（IV部）両教授との共訳，培風館，1977.

IV その他の活動

・1976年4月2日，別掲のように本研究室主催で行われたポール・マッセン教授の講演と研究懇談会に主催者側の一人として参加した。また，その時の講演内容を同時通訳者の近藤千恵氏（本学卒業生）の手をわずらわして，「児童心理」30巻10号（1976年10月号162―182頁）に掲載した。

○4月より6月まで聖心女子大学，ならびに東京神学大学に非常勤講師として出講した。

○日本心理学会発行「心理学研究」，日本教育心理学会発行「教育心理学研究」，それぞれの編集委員の一人として編集委員会に出席し，一部の投稿原稿を閲読した。

○日本心理学会将来計画検討委員の一人として，数度会合に出席した。

○1976年9月25日シカゴ日本人学校のＰＴＡ例会において「海外生活における適応の諸問題」について講演を行なった。

○前年度に引続き76年6月までＩＣＵ大学院副部長として，藤田若雄部長を補佐し

大学院の運営ならびに2研究科博士課程の新増設実現に努めた。

都留春夫教授

I　研究活動等

前年度に引つづき個人カウンセリング，集団カウンセリング，エンカウンター・グループ，Tグループなどの実践を通して，対人関係や小集団活動が個人の態度・行動性格などの変化に及ぼす影響についての研究を継続している。

1976年後期は青山学院大学大学院の「社会心理学研究」の非常勤講師をつとめた。

1976年7月8—12月，大分県九重の国立大学共同研修所における全国国立大学学生相談員の合宿研修会に講師として参加した。

1976年12月より毎月1回「PCA（Person-centerd Approach）ウィークエンド」を主催し，小集団活動のなかの人間関係と相互作用の研究を含めた実践活動をはじめた。

1977年3月25—30日　東京大学学生相談所主催の「自己理解のためのグループ合宿」にファシリテーターとして参加した。

II　学会発表・講演等

1）1976年5月22—23日　日本相談学会第9回大会に出席した。

2）1976年9月27—29日　日本心理学会第40回大会（中京大学）においてシンポジウム「グループ・アプローチの展開とその将来的課題」企画者として参加した。

3）1976年5月24日　国立療養所中部病院付属看護学院において講演をした。

4）1976年7月31日　国立療養所三重病院付属看護学院において講演した。

5）1976年12月4日　第12回東海四県看護研究学会において「健やかないのち，病むいのち」について講演した。

III　著　　作

1）『「カウンセラーのその人らしさ」について』「カウンセリング」Vol. 8—1（No.31）19—23頁

2）『端いの社会・結びの社会』「カウンセリング」Vol. 8—2（No.32）8—12頁

3）『健康とのであい』「カウンセリング」Vol. 8—3（No.33）2—4頁

4）『カウンセリングとしての「なかまづきあい」』「カウンセリング」Vol. 8—4（No.34）11—15頁

5）『最近の C. Rogers』河合隼雄・成瀬・悟策佐治守太編「臨床心理学ケース研究」（印刷中）

6）『私のファシリテーター体験』村山正治編「エンカウンター・グループ」（講座心理療法」第7巻）福村書店（印刷中）

向井敦子助手

I　研　究　活　動

1)　「仮説的行動図による不協和過程の分析」この研究は大学院博士課程の深谷澄男氏との共同研究である。一昨年に行なわれた実験のビデオテープに基ずき，行動図を仮説し，不協和状況の分析を継続中である。同じタイトルで次回の日本心理学会に発表の予定である。

2)　乳幼児の行動観察，1976年2月生れの女児H.M.を対象として縦断的な観察を継続中である。

明田芳久非常勤助手

I　研　究　活　動

1)　古畑和孝教授の指導のもとに，児童の道徳発達に関して，実験社会心理学的観点から研究。

2)　数理統計学の基礎についての研究会（立教大学・池田央教授他），Piaget 研究会（東京大学）へ参加。

3)　東京神学大学（教育心理学），桐朋学園大学短期大学部（社会心理学）で非常勤講師。

II　著　　作

1)「児童の道徳判断変化に及ぼすロールプレイングとその聴取の効果」『教育心理学研究』1976，24，35—44.

2)「子どもの道徳性とロールプレイング」『教育心理』（日本文化科学社）1976，24，(9)，696—699

3)　書評：J. ボウルビィ（黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・訳）「母子関係の理論　I　愛着行動」岩崎学術出版社，1976.「年報社会心理学」1976，17，240—241.

八木沢慶子非常勤助手

研究活動など

1)　梅津八三教授の指導のもとに，行動調整における構成信号系の機能について行動体制特性という観点から研究し，修士論文「等価反応状況における色，形要因の優位性およびその優位性変換を輔ける工作」を国際基督教大学大学院委員会に提出した。

2)　国立精神衛生研究所優生部A班において，山本和郎主任研究員の指導の下に，自閉症児を対象にした地域精神衛生活動に参加している。

3)　南博監訳「図説，現代の心理学」（全6巻）講談社，1976. 第1巻，星野命訳「パーソナリティ」第3章，心理テスト，および，第5章，代表的パーソナリティ理論の下訳を担当した。

C　視聴覚教育研究室

西本三十二客員教授の「出版記念と喜寿の祝い」の会が，1976年11月25日パレス・ホテルで開かれた。布留武郎大学院教授は，1977年3月末日をもって専任の職を退かれるが，4月以降客員教授として博士課程後期の指導にあたられる。なお，布留教授の最終講義が1977年3月23日におこなわれ，同日記念パーティがＩＣＵ食堂で開かれた。

当研究室に事務局を置く，日本視聴覚教育学会第13回および日本放送教育学会第21回合同大会が，松下視聴覚教育研究財団のセンターで，1976年10月9日，10日の両日おこなわれた。当研究室からは，教職員，大学院学生の全員が参加した。

布留武郎教授

Ⅰ　研究活動等

放送文化基金による研究「テレビジョンと認知型」について結果の分析を続行。完成原稿第1部を本誌に掲載。またこの研究の一部門となる「児童の認知型と学校放送番組の理解の仕方」に関して，飯塚・赤枝の研究を指導した。

博士課程の院生に対し，「利用と満足」に関する文献研究の指導を行った。

Ⅱ　学会発表

日本放送教育学会・日本視聴覚教育学会合同研究大会（1976年10月，東京）において，「テレビ視聴パターンと認知型―追跡研究の結果」を発表した。

Ⅲ　社会的活動

ＮＨＫ総合放送文化研究委員。松下視聴覚教育研究財団評議員。日本教育社会学会評議員。日本視聴覚教育学会会長。日本放送教育学会常任理事。

中野照海教授

Ⅰ　学会，研究会活動等

(1) International Seminar on Children and Television, Tokyo, June 8-9, 1976, Chairman として参加。

(2) 第10回視聴覚研究全国大会，東京，1976年7月29日―31日，「教育のシステム化とは」講演，「視聴覚教育の現状と未来」パネル討議のパネリスト。

(3) 第15回日本語学ラボラトリー学会，東京，1976年8月3日―4日，「教材の開発研究」講演。

(4) 富山県放送教育研究連盟（8月10日）および岐阜県放送教育研究会（8月12日），「放送教材の利用と放送教育の評価」講演。

(5) Asian Seminar on Educational Technology (sponsored by Japan Ministry of Education and UNESCO), "Roles and Functions of Educational media," Lecture, August 17, 1976.

(6) "Design of Instructional Systems with Spacial Reference to Educational Broadcast," Lecture, NHK Training Centre, August 18, 1976.

(7) 教育技法研究会，東京，10月7日，「教育近代化への提案」講義。

(8) 第2回教育工学研究協議会，東京，10月4日，1976年，「教育工学の海外の動向と国際交流の現状」課題研究発表。

(9) 松下電器中央研究所において，「視聴覚教育の効果講義」，1976年10月27日。

(10) 東北視聴覚教育・放送教育研究会，山形，1976年11月10日，「映像による教育」講演。

(11) 日本電気通信学会教育方法分科会，東京，1976年11月26日，「教育工学・視聴覚教育の教育計画」発表。

(12) The 11th Janan Prize Internatinal Contest of Educational Programmes, Tokyo, Feb. 18—March 1, 1976, Vice-President として参加。

(13) International Symposium on Educational Potentialities of Broadcast, Tokyo, Feb. 26, 1976, modulater として参加。

(14) 放送文化基金による「学校教育における放送利用の総合的研究」に前年度に続いて参加。

(15) 前年度に続き，日本視聴覚教育学会常任理事，編集委員。日本放送教育学常任理事。全国放送教育研究連盟研究特別委員会委員，NHK学校放送諮問委員会委員。"日本教育工学雑誌"（文部省・日本教育工学センター協議会）常任編集委員，編集幹事。日本教育工学協議会理事。「視聴覚教育賞」（日本映画教育協会）選考委員。

II 著　　作

(1) 「放送教育の再点検——テクノロジストの観点から」，『放送教育』，9月，1976年，pp. 14—18

(2) 「教育近代化への提案」，『A-V Science』，No. 109, 1976, pp. 19—26.

(3) 『視聴覚教育百科4——視聴覚教材利用の効果』第一法規出版，1977年，21 pp.

(4) 「教育工学の海外動向と国際交流の現状」『第2回教育工学研究協議会集録』，1976, pp. 78—79.

(5) 「教育工学・視聴覚教育の教育計画」，『信学会教育方法分野会集録』，1976, pp. 1—4.

阿久津喜弘準教授

I 研究活動等

1) 昭和51年度科学研究費補助金による「学級集団のコミュニケーション構造と学級成員および学級集団の革新受容性との関係についての実証的研究」を実施。

2) 日本教育社会学会第28回大会（1976年9月30日—10月2日，於　山形大学）

において，共同研究「児童のオピニオン・リーダーシップの機能に関する実証的研究」を発表（発表者：阿久津喜弘・浜野保樹）。

II　著　　作

1）『コミュニケーション――情報・システム・過程』（現代のエスプリ110号）至文堂，1976年9月（編集・解説）。

2）「映像環境と人間形成」木原健太郎・松原治郎編『現代社会の人間形成』(現代教育社会学講座3）東京大学出版会，1976年6月，161―178頁，

3）「コミュニケーション過程と発言指導」『特別活動』9巻4号，1976年4月，6―9頁。

III　そ　の　他

日本視聴覚教育学会理事および編集委員，日本教育社会学会事務局長。

石本管生助教授

I　研究活動等

1）ＣＡＩ学習プログラミングに関わる諸変数の研究。

2）Non-Japanes Students の漢字学習用ＣＡＩシステムの開発と実用化研究（日本語科石田敏子助手との共同研究)。

3）放送文化基金財団基金による研究プロジェクト「学校放送における放送利用の総合的研究」に参加（筑波大グループとＩＣＵグループの共同研究プロジェクト)。

4）ＩＣＵ教育研究所ＳＡＴ追跡研究プロジェクト（主査　原一雄教授）に参加。1974～1977年ＳＡＴデータのコンピュータによる分析を担当。

II　学　会　活　動

日本放送教育学会・日本視聴覚教育学会合同研究大会（1976年10月），課題研究「授業の設計のモデルと手続き」にパネラーとして参加。

III　そ　の　他

日本教育工学雑誌編集委員

飯塚泰弘助手（非常勤）

研究活動等

1）1976年10月，日本放送教育学会・日本視聴覚教育学会合同研究大会で，「認知型と学校放送社会科番組」を発表。また同学会において，布留武郎教授と連名で「テレビジョンと認知社型―因果関係について」を発表。

2）布留武郎教授の研究「児童の認知型とテレビ視聴パターン」（本誌掲載）の調査データの分析を担当。

3）多変量解析の基礎についての研究会（立教大学池田央教授指導）へ参加。

4）ＩＣＵ計算センターのＩＢM370／115用の統計解析プログラムを開発中（教育学・社会学の調査データの分析を中心として)。

浜野保樹助手（非常勤）

研究活動等

1） 1975年10～11月，青山学院女子短期大学岩崎三郎専任講師の「都市における成人講座受講者の学習行動」に関する調査に参加。

2） 1976年10月，日本教育社会学第28回大会（山形大学）において，阿久津喜弘準教授らと連名で，「児童のオピニオン・リーダーシップ機能に関する実証的研究」を発表（同学会論文集 116—119）。

D 理科教育法研究室

研究室メンバーは各自専門分野の研究課題に取組むとともに，理科教育に関する種々の研究活動に励んでいる。

研究室行事としては77年2月24日午後に渋谷区立長谷戸小学校玉田泰太郎教諭を講師に招いて「わかる楽しい授業めざして——到達目標研究の役割」と題する講演会を開催した。この講演や質疑の大要は近く印刷される予定である。

三宅彰教授

I 研 究 活 動

高分子物性の理論的研究

(1) ねじれのある stiff chain の統計力学

(2) 高分子臨界共溶現象

理科教育におけるエネルギー概念の導入

II 学 会 発 表 等

星野義昭，三宅彰：ねじれのある stiff chain の理論，IV：1976年4月7日（日本物理学会年会，名大）V：1976年10月8日（日本物理学会分科会，山形大）

三宅彰，星野義昭：stiff chain の動的挙動，I：1976年4月7日（日本物理学会，名大）II；1976年10月8日（日本物理学会分科会，山形大）

三宅彰：高分子臨界共溶現象の理論について；1976年5月31日（高分子学会年次大会，東京農工大）

三宅彰，星野義昭：拡張された stiff chain モデルの拡がり；1976年10月18日（高分子討論会，名大）

三宅彰：高分子鎖の統計力学；1976年10月9日（高分子物性講演会，山形大工，米沢）

滝川洋二，永田英治，森隆，岩崎敬道，三宅彰：エネルギー概念の教育史；1976年8月19日（日本理科教育学会全国大会，熊本）

岩崎敬道，永田英治，滝川洋二，森隆，三宅彰；「エネルギーは仕事をする能力」と教えるのは適切か：1976年8月20日（日本理科教育学会全国大会，熊本）

滝川洋二，三宅彰：他の物体を暖めることができるものはエネルギーを持っている——エネルギー授業の在り方——；1977年2月22日（日本理科教育学会関東支部大会，群馬大）

森隆，三宅彰：熱現象から入るエネルギープラン；同上

永田英治，三宅彰：エネルギープランの授業報告；同上

岩崎敬道，三宅彰：子供のつかんだエネルギー像；同上

Ⅲ 著　　作

"Theory of Twisted Stiff Chains, Ⅲ and Ⅳ" Repts Progr. Polym. Phys. Japan, 19, 1976, 43—46 and 47—50 (A. Miyake and Y. Hoshino)

"On the Theories of Critical Solution of Polymers", Repts. Progr. Polym. Phys. Japan, 19, 1976, 51—54.

石川光男教授

Ⅰ 研 究 活 動

(1) 生体高分子に対する放射線効果

(2) 高分子電解質の溶液中における形態変化

(3) 高校・大学の物理教育における総合的評価法

(4) 拡散型思考のコンピューターによる指導と評価

Ⅱ 学 会 発 表 等

(1) 物理教育における分析・総合能力の育成と評価；1976年12月4日，（物理教育学会北海道支部会特別講演，北大工学部）

Ⅲ 著　　作

(1) Radiation Effects of Poly(L-Glutamic Acid) and Poly(L-Lysine) in the Helix-Coil Transitional State, Radiation and Environmental Biophysics, 13 (1976),115-123 (M. Ishikawa, K. Takakura)

(2) Conformational Transitition of Maleic Acid-Vinyl Acetate Copolymer in Aqueous Solution, Rep. Prog. Polymer Phys. Japan, 19 (1976), 55-56 (M. Ishikawa, K. Takakura, N. Shiobara)

柿内賢信教授

著　作　等

「職業教育及び技術教育の諸問題」：産業教育 *26* (1976) 14—20.

「読み書き，そろばん，農本主義」：児童心理，12月号 (1976) 臨時増刊，p.241

"Science and Decision Making"; Peace Rescarch in Japan 1974—75 (published in 1976)

"Problems and Opportunities in Elementary Science"; Proc. In-Service Training of Elementary School Science Teachers, 1975, Kyoto (published in 1976).

大内謙一教授

I 研 究 活 動

1. NMR Studies of Hydrogen Bonding in Acetic Acid-Acetonitrile System.

この種の系の研究では，特に水の存在が測定の誤差をもたらすので，水を除くことに十分に注意を払い，好結果をえた。この二成分系に種々の平衡関係を設定し，コンピューターによって計算した結果，実測値を再現することができた。近日中に，J. Chem. Soc. に投稿予定

2. Hindered Internal Ratation in [^{15}N] Acetamide.

種々の溶媒中のアセトアマイドのC-N結合に関する束縛回転障壁を tatal NMR line shape method によって測定し，また，アマイドプロトンのケミカルシフを理論的に計算し，溶媒効果を議論した。近日中に J. Chem. Coc. に投稿予定。

II 学 会 活 動

数年前より，日本化学会NMRデータ集積，分析，NMR評価に参画した。この委員会は，昨年11月20日現在で，2017枚のNMRチャートを集積し，スペクトルのデジタル化，検常などを行っている。

III 著　　作

「大学初年級の化学教育における酸一塩基理論の取り扱い方について」大内謙一，梅本公子，亀谷進，国際基督教大学報1—A教育研究*19* (1976) 141—167. 本論文は亀谷進修士論文の一部を加筆，修正したものである。

勝見允行教授

I 著　　作

研究論文

1. *Katsumi, M.*: "Auxin-gibberellin relationships in their effects on hypocotyl elongation of light-grown cucumber seedlings IV. Inbibition of IAA-induced elongation by N,N'-dicyclohexylcarbodiimide and its reversal by gibberellin A_3." Plant & Cell Physiol. *17*: 139-148 (1976).

2. *Katsumi, M.*: "ibid. V. Reversal of N, N'-dicyclohexylcarbodiimide-induced inhibition of section growth by some adenine nucleotides and gibberellin A_3." Plant & Cell Physiol. *17*: 997-1001 (1976).

3. Kazama, H. and *Katsumi, M.*: "Biphasic response of cucumber hypocotyl sections to auxin." Plant & Cell Physiol. *17*: 467-473. (1976).

総 説

1. 勝見允行：「ジベレリンによるアミラーゼの誘導」蛋白質・核酸・酵素（別刷）76(2)：286-291 (1976).

2. 勝見允行：「植物を用いる分析法」基礎生化学実験法6，丸善，東京p. 258

—269 (1976)

II 学会発表等

1. *Katsumi, M;* Inhibition by DCCD of endogenous growth, IAA-induced elongation and ATPase activity of cucumber hypocotyl sections and its prevention by GA_3 and some adenine nucleotides. *The 9th International Conference on Plant Growth Substances*, Lausanne, Swiss, 1976. Collected Abstracts of the Paper-demonstrations. p. 188-190.

2. 風間晴子・勝見允行：キウリ下胚軸切片のジベレリン・オーキシン伸長作用と光の影響；日本植物生理学会大会 (1976).

III その他の活動

昭和53年度以降のための高校生物 I 教科書を分担執筆。

山口俊夫教授

I 研究活動

骨格筋の興奮収縮連関においてダントロレンソディウムは抑制的な薬理作用を持つと言われているがその作用機序については不明な点が残されている。単一骨格筋線維に直接電気刺激をあたえることによって惹起される単収縮の薬物による効果を調べ，骨格筋の興奮収縮連関の様子を調べている。

II 発表論文

"Activation of the contractile mechanism in the anterior byssal retractor muscle of *Mytilus edulis*" by H. Sugi & T. Yamaguchi : J. Physiol. 257 : 531—547.

その他の研究室メンバー

I 学会発表

永田英治，森隆，山桝雅信：ビニールホースを使ったトリチェリの実験；1976年8月20日（日本理科教育学会全国大会，熊本）

篠原文陽児，高原尚三，笠耐：学習者のみた物理教育の問題点——アンケート結果による一般人のみかた——；1976年10月8日（日本物理学会分科会，山形大）

II 研究論文等

F. Shinohara : "Computers in Education", Physics Education, Institute of Physics, England, 1976, *11* (March)

篠原文陽児：「高校物理におけるオームの法則と評価問題」，理科教室，*19*（3），1976，84—89.

F. Shinohara and Y. Kakiuchi : "Decipherment of Hieroglyph and Cuneiform as a Case Study of the Process of Learning", Learning and Evaluation Research Project Working Paper *6*, 1976, 37.

笠耐，篠原文陽児，高原尚三：「学習者のみた物理教育の問題点——高校，社会

人のみる問題点——」，日本物理教育学会誌，*25*（1），1977，37—42.

篠原文陽児：書評「絵でみる物理学」（東京書籍，1976）；日本物理教育学会誌，*25*（2），1977.

教育社会研究室

原　喜美教授

I　研究活動等

(1)　フィリピン，アテネオ・デ・マニラ大学に在職中，15の大学を訪問し，主として，女子の高等教育，女性の地位について面接により調査を行う。なお帰国後1976年8月に再び渡比し，フィリピンにおける女子の大学生の「社会的還元の意志」について意識調査を行う。

(2)　ユネスコ・アジア文化センター山口真氏他数名と，日本の女性の社会的地位に関する共同研究に参加する。

(3)　日本の農村における主婦の役割について研究を行う。

(4)　フィリピンにおいては，De La Salle 大学 Maryknoll 大学，East 大学などにおいて，a）日本の女性について，b）工業化とその環境問題について講演を行う。また Development Academy of the Philippines において "Environmental and Social Impacts upon Development" と題し，日本の工業化，主として京葉工業地帯における変貌について講演を行う。

(5)　帰国後家庭科教育学会の大会講演者として「アジアにおける家庭生活の現状と婦人の問題—フィリピンについて—」講演を行う。他フィリピンについて4件

(6)　日本教育社会学会大会において「フィリピンにおける女子高等教育」について報告

(7)　ＩＳＡ（International Sociological Association）の研究部会の実行委員として来年度スエーデンにおいて開催される大会の準備を行う。

II　著　　作

(1)　「卒業生によるＩＣＵ在学経験の評価—国際基督教大学創立25周年記念，卒業生追跡調査報告（要約）—」トロイヤー，原一雄，原喜美，田中清彦。
ＩＣＵ教育研究19に掲載
および英文による *Alumni Evaluation of Their ICU Experience* 報告書発行。

(2)　"Industrialization of Japan——Environmental and Social Impacts upon Development", Development Academy of the Philippines 機関誌に掲載August, 1976.

(3)　「アジアにおける家庭生活の現状と婦人の問題」家庭科教育学会誌1976年に掲載。

以　上

英語教育研究室

大学院比較文化研究科が設置され，それに伴って，N. Brannen 氏 R. Matthews 氏，斉藤和明氏が英語教育から比較文化の方に移った。7月16日から8月1日まで第1回ＩＣＵ言語科学夏季講座を開いた。井上和子，小林栄智，村木正武，F. Peng，桜井茂治，J. Emonds (UCLA)，S. Davis (SUNY, Albany)，B. Saint Jacques (UBC)，D. Steinberg (U. of Hawaii, Manoa)，W. Engel (Vanderbild U.) を講師とし，多数の受講者があった。7月17—18日第1回幼児言語学 Symposium，7月24日第3回言語社会学 Symposium，7月31日—8月1日第2回日本手話学術研究会が開かれ，8月30—31日には第15回ＩＣＵ夏季言語学研究会が開かれ多数の参加者があった。井上和子を研究代表者とする試験研究「日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用」，F. Peng を代表者とする試験研究「健聴児ならびに聾児の言語行動形式の研究」が助成金を得て研究が行われた。7月には *Descriptive and Applied Linguistics Vol. 9* が発行された。以上は，英語教育研究科と，教養学部語学科との協力によるものであることを付記しておく。

英語教育法，井上和子教授

Ⅰ　研　究　活　動

（a）　昭和51年度文部省科学研究費試験研究

「日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用」の研究代表者として，76年5月より毎月一回研究会を開催し，研究の中間報告をするとともに，共同研究者との意見交換を行っている。

（b）　チョムスキー著『言語に関する反省』

(*Reflections on Language*, Pantheon 1975) の読書会を1976年9月以来主催している。

（c）　変形規則との係わりから見た日本語構造の特殊性の研究，（論文bとして発表）

Ⅱ　著　　書

『変形文法と日本語・下　—意味解釈を中心に』大修館，1976年4月。

Ⅲ　論　　文

（a）　"Interim Report on Learning Problems Found in Second Language Learning : Transitive-Intransitive Distinction in English and Japanese." 井上和子（編）『研究報告—日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用』1976，6月，1—42.

（b）　「日本語に変形は必要か」『月刊言語』大修館，76年11月より連載，81——89，96—103，111—118，94—102，102—109.

（c） 「受動文の問題点—上，下」『英語文学世界』英潮社，76年11月，12月，18—21, 30—33. 36.

（d） 「自動詞と他動詞—上，下」『英語文学世界』英潮社，77年1月，2月，22-25, 40-43.

（e） "Reply to Tonoike."『言語研究』第71号 日本言語学会（1977年3月発行予定)。

（f） 「日本語の論理性」岩波書店『日本語講座』—月報，1977年3月。

IV 書　　評

チョムスキー著『文法の構造』『月刊言語』1977年2月，44-46.

辞　書

（a） 『国語学辞典』改訂版，国語学会編，新言語学関係，大・中項目約15。東京堂出版。

（b） 『心理学小辞典』大山正・藤永保・吉田正昭編，生成文法関係，中・小項目約10。有斐閣。

講　演

「生成文法の着眼点」防衛庁情報電計室，ＩＲシステム主催，1977年3月12日

小林栄智教授

1. 今学年度はOld English Poetryの研究に重点をおいた。特に大学院生との共同になる Old English Poetry の言語学的，文学的な研究は実のりのあるものであった。

2. ・日本英文学会（於広島大学）に出席（5月）
・中世英文学談話会（於上智大学）の春，秋の研究会に出席（5月，12月）
・中世英文学談話会の主催による特別講演会の司会をする。講演者：Professor H. L. Rogers, Sydney Univ. 演題："The style of Old English Poetry, especially *Beowulf*."（於上智会館）（3月）
・関東甲信越，英語教育学会（於東京教育大学）に出席（7月）

3. 論　　文

・"The OE version of *Apollonius of Tyre*,"『中世英文学談話会報』No. 14 (Dec. 1976), 10—12.（同研究会で発表したペーパーの要旨）
・"The 'Lost' or 'Expurgated' Portions of the Old English *Apollonius of Tyre*"（1977年予定）
・"The Prelude to Beowulf's Fight with Grendel"（『教育研究』20号に予定）

4. その他

・『講談社・和英辞典』，1976（四人の編集委員の一人として参加）

村木正武

2）学会発表等

第15回ＩＣＵ夏季言語学研究本に "Certain Amliguities and the Relative Clause Structure" を研究発表する。

3）著　　作

書評 "J. Hinds Aspects of Japanese Discourse Structure"『英語学第16号』開拓社 116—129。

4）その他の活動

第１回ＩＣＵ言語科学夏季講座において，生成音韻論を担当。井上和子を代表者とする試験研究「日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用」に参加。

Richard Linde 準教授

Research Activities : English vocabulary study, with others. Interim report: "An Analysis the English Vocabulary Items Attained by High School Graduates in Japan," published in *Annual Reports*, Volume 2, 1977, The Division of Languages, International Christian Univrsity.

Paper read : "Aural Comprehension as a Language Skill." The Association of College Women, Decemder 16th. 1976.

Research in process : The nature of English Conversation.

Meetings and other research are all related to the Freshman Englisg Program ; its methods and materials.

2. 大学院教育学研究科修士論文

1976年6月卒業者　9名

A　教育哲学

渡辺　尚　日本における近代化と教育の比較文化的考察

B　教育心理学

譚　恵　江　言語行動の未だ発現していないある盲児の行動体制次序変換過程と信号系の構成原則間及び様式間変換過程における心理学的工作

C　視聴覚教育法

武市　恭子　「利用と満足」アプローチの系譜と問題点

D　英語教育法

新井　恵子　Replacement and Co-development of Speech

深谷　順子　An Experimental Analysis on the Development of Comprehension and Production of Passive Voice through the Spontaneous, Eliciting and Inducing Situations

堀　　素子　An Applied Sociolinguistic Approach to Second Language Acquisition : Current State and Perspectives

中岡　典子　Some Constraints on Reduced Relatives

清水　真一　Right Node Raising and a Rule of Semantic Interpretation

E　理科教育法

喜多　　誠　理科教育における Entropy 概念の意義

1977年3月卒業者　18名

A　教育哲学

大城ジョージ　The Moral Philosophy William James

島上多賀子　石田梅岩の思想の特質とその歴史的意味

清水　良一　クロード・アドリヤン・エルヴェシウスの教育思想

B　教育心理学

八木沢慶子　等価反応状況における色・形要因の優位性およびその優位性変換を輔ける工作

C　視聴覚教育法

浜野　保樹　イノベーティブネスとコミュニケーション行動に関する実証的研究

早川　栄一　「保存」の獲得に関する映画の効果についての一研究

宮崎けい子　オピニオンリーダーシップ機能分化に関する実証的研究

山田　幸子　外国語学習を規定する諸要因に関する一研究
——その予備的調査——

D　英語教育法

阿部美枝子　An Analysis of *-by* Adverbs in English

牧野　栄子　Psychological Approach to a Second-Laguage Learning at Advanced Level

岡田佐保子　A Study of the Language of the Book of Common Prayer

中村　芳子　One More NP—Deep NP -wa-

大西　直樹　The Earthly Paradise Its Theme and Variations

白輪地　弘　A Study of Certain Sentence Adverbs in English

鈴木　隆子　Property Preposition

田中　玲子　A Study of the Sequence of Tenses in English

E　理科教育法

森　　隆　中等物理教育におけるエネルギー概念について

田中　清彦　Physics Education with The Computer
—Dialogue Type CAI Programs—

3. 教育実習報告

1976年度の教育実習には58名（都の受入れ承認33名）の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1.　実習生総数　58名

男　　子　17名

女　　子　41名

2.　実習日程

1975年11月26日～12月9日	玉川学園高等部
1976年5月25日～6月7日	熊本市立藤園中（熊本県）
5月31日～6月12日	三鷹市立第五中，和歌山市立西浜中(和歌山県)，郡山市立大槻中（福島県）帝塚山高校（奈良県）
6月7日～6月19日	港区立三河台中，三鷹市立第一中，三鷹市立第二中，三鷹市立第三中，調布市立第三中，調布市立第五中，小金井市立東中，小金井市立緑中，三鷹高校，大泉高校，群馬県立前橋女子高，桐生市立東中，前橋市立木瀬中（群馬県），県立木更津高校，翌志野市立第一中（千葉県），静岡雙葉中（静岡県），向陵中（札幌市），県立名古屋西高（愛知県），和洋女子大附属九段高校。
6月9日～6月22日	海城高校（新宿区），白梅学園高校（小平市）
6月14日～6月28日	雙葉高校（千代田区）
7月12日～7月20日	西南学院高校（福岡県）
8月23日～9月4日	諏訪清陵高（長野県）
9月1日～9月4日	西南学院高校（福岡県）
9月6日～9月18日	国立高校（国立市），県立清水東高（静岡県）県立金沢泉丘高（石川県）
9月13日～9月25日	小金井市立東中
9月20日～10月2日	小金井市立第二中

9月27日～10月9日　函館東高（函館市）

10月25日～11月6日　大分大附属中（大分県），茅ケ崎市立松林中（神奈川県）

12月9日～12月22日　清教学園中高（大阪府）

3.　実習協力校

教科＼学校名	三鷹一中	三鷹二中	三鷹三中	三鷹五中	調布三中	調布五中	小金井東中	小金井緑中	小金井二中	三河台中	三鷹高校	国立高校	大泉高校	前橋女子高
社会		3					1		1					1
理科	2						1							
数学							1							
英語	3		5	5	1	1	1	1		1	3	2	1	
計	5	3	5	5	1	1	4	1	1	1	3	2	1	1

西浜中	静岡雙葉中	市立東中	習志野一中	雙葉高校	木更津高校	海城高校	玉川学園高	名古屋西高	藤園中	大槻中	西南学院高	向陵中	松林中	清陵高	和洋女子大附	木瀬中
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

清水東高	金沢泉丘高	清教学園	白梅学園	帝塚山高	大分大附属	函館東高	合計
							6
							3
				1			2
1	1	1	1		1	1	47
1	1	1	1	1	1	1	58

4. 学 科 別

学科＼性別	男	女	合計
人文科学科	3	4	7
社会科学科	3	3	6
理学科	1	2	3
語学科	4	21	25
教育学科	5	3	8
大学院教育	1	3	4
大学院行政	0	0	0
聴講生	0	5	5
合計	17	41	58

5. 1976年3月卒業生239名中，教員免許状を取得した者は51名（社会11，理科12，数学2，英語30），また，教員就職状況は下記の通り。

公立小学校　男子1名，女子1名（社会）
公立中学校　男子1名（英語）
公立高等学校　男子2名，女子3名（英語）
　　男子2名（社会）
私立高等学校　女子4名（英語）
　　女子2名（数学）

4. ひとのうごき

■新任・就任・辞任

永田博人助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年4月より着任。
竹中真助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年4月より着任。
山田幸子助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年9月より着任。
鈴木説子秘書（大学院教育学研究科・教育学科・教育研究所事務室）：76年4月より着任。
古畑和孝教授（教育心理学）教育学科科長・教育研究所所長就任。：76年4月。
Donald C. Worth 教授（物理学）教養学部長就任：76年4月。
三宅彰教授（物理学）教育研究所所長就任：76年11月。
阿久津喜弘準教授（教育コミュニケーション）教養学部副部長就任：76年4月。

星野命教授（心理学）大学院副部長就任：76年4月。

中野照海教授（視聴覚教育）大学院教育学研究科科長・専攻科科長就任：76年4月。

都留春夫教授（カウンセリング）国際教育交流室室長就任：76年4月。

山口俊夫準教授（生物学）：76年4月より教授に就任。

古畑和孝教授（教育心理学）教育研究所所長を辞任：76年10月。77年3月退任。

磯田一雄準教授（教育方法学）：77年3月退任。

布留武郎大学院教授（視聴覚教育）：77年3月退任。

梅津八三大学院教授（心理学）：77年3月退任。

永田博人助手（非常勤）（視聴覚教育）：76年8月退任。

山田幸子助手（非常勤）（視聴覚教育）：77年3月退任。

E. R. Beauchamp フルブライト招聘講師（比較教育　）：75年9月から一年間教えられ，77年6月，ハワイ大学に帰任。

■海外出張・休職・帰任

星野命教授（心理学）：76年9月1日より77年6月30日迄，休暇。シカゴ，カリフオルニア大学（サンタバーバラ）等で研究に従事。

Ronald L. Rich 教授（化学）：76年7月24日より一年間休暇，米国 Kansas 大学へ。

勝見允行教授（生物学）：76年8月25日より一ケ月間旅行，植物生長物質に関する第9回国際会議（スイス，Lausanne）に出席，ヨーロツパの各研究所訪問。

柿内賢信教授（物理学）：76年3月23日から2週間，文部省の依頼により，タイ，シンガポール，フイリピン各国の研究所視察。

76年10月21日から20日間旅行，ＩＵＰＡＰ会議（ベルギー）およびＵＮＥＳＣＯ会議（米国）に出席。

77年3月10日から一ケ月間，日本学術振興会の依頼により米国の科学教育視察。

Donald C. Worth 教授（物理学）：77年3月1日より一ケ月間，米国旅行。